

## 学位請求論文概要

### 内田不知庵研究——明治二〇年代前半における批評家内田不知庵の文学活動および文

#### 学論に関する研究

大貫 俊彦

内田魯庵（慶応四年閏四月五日―昭和四年六月二九日）は、明治二〇年代から昭和初年代にかけて批評家・小説家・翻訳家・編集者・随筆家・好事家として名を馳せた文学者である。

本学位請求論文は、多様な人生を送った六一年間の生涯のなかでも、主に「不知庵主人」の号で文芸批評をはじめてから『文学一斑』を刊行するまでの明治二〇年代半ばまで、すなわち出発期から文芸批評家としての成熟期をひとつの時代区分とし、その中で文芸批評の根幹をなしていた文学思想とその展開を中心に据えながら、同時代の幅広い文学活動との繋がりを考察したものである。従来、この不知庵時代については、「座談の名人」（坪内逍遙）と称された晩年の魯庵の回想に基づきながら研究されてきた。しかし魯庵の晩年を知る者が伝えてくるように、自らについて言及した回想が当時の様子を正確に伝えているとは限らない。本研究では魯庵の回顧談の重要性は認めながらも、そのような晩年の回想ではなく、同時代の資料や言説を用いることによって、この時期の不知庵像を捉えることに努めた。

以下、大きなテーマごとに区切りながら、各章の概要を記す。

#### 序章…内田不知庵（魯庵）研究概観および本研究の課題と方法について

（書き下ろし）

研究全体の指針となる本章では、明治文学の証言者としての魯庵の存在が「明治文学研究」に与えた影響や、魯庵の没後に彼の若い友人たち（齋藤昌三氏、柳田泉氏、木村毅氏）の手によって、随筆家・愛書家・趣味人としての魯庵をクローズアップした随筆集が出版される経緯、さらに戦後の内田魯庵研究を概観することによって、従来の研究が【1】最終的には魯庵の回想に従う形で行われてきたこと、【2】文学論争を中心とした把握の仕方によって批評家内田不知庵が坪内逍遙の「亜流」として位置づけられてきたことを研究の偏りとして指摘し、この二つの観点が明治二〇年代の不知庵の文学活動を捉える可能性を狭めていることを論じた。

そして本研究では、晩年の回想ではなく、これまであまり積極的には用いられることのなかった資料（主に書簡資料）を利用しながら、同時代の言説、および作家との関わりに目を向けることによって、この時期の不知庵像を捉えなおすという研究方針を提示した。

・文芸批評家内田不知庵の登場について

第一章…「文芸批評家、内田不知庵の「出発」——明治二〇年代初頭の批評言説と批評第一作「山田美妙大人の小説」をめぐる」(初出『文学・語学』第二〇五号・平成二五年三月)

明治二〇年代を代表する文芸批評家内田不知庵の登場は、これまで後年の魯庵の回想によって、偶然性に彩られた挿話として捉えられてきた。

本章は、登場の契機となった批評第一作「山田美妙大人の小説」(『女学雑誌』明治二一年一〇月)を同時代の思潮、すなわち出版状況の変動によって生じた「批評」の要請、およびその「標準」をめぐる議論のなかに置きなおすことにより再評価を試みた。そこから得られた結論は、「山田美妙大人の小説」が、回想に見られるような美妙個人に宛てた「私信」の枠組みを大きく超えて、右の思潮に即応すべく書かれていたということである。混迷する文学状況のなかで坪内逍遙が提唱した「文学改良」を推し進める姿勢を示し、名声の上昇とともに世評に振り回される山田美妙を鋭く批判する。そこで用いられる多義的な修辞技法の使用には、自らの観察眼の卓越性をも読み取れる。

また、これまでの研究では個人的な文学観への影響と見なされてきた『小説神髓』の援用についても、不知庵は文学が進むべき指標を指し示すものとして用いる一方で、『小説神髓』下巻の小説技法論を作品評価の「標準」として批評の実践を行ったと意義づけることができる。

内田不知庵の「山田美妙大人の小説」は「批評」とその「標準」が求められた時代の要請に即応した内容を伴っており、そこに含まれた批評性こそがその登場を準備したのである。

・初期小説について

第二章…「共鳴する裏屋の響き——内田不知庵「酒鬼」論」(『早稲田大学高等学院研究年誌』第五六号・平成二四年三月)

「酒鬼」(『女学雑誌』明治二二年五月〜七月)は、内田魯庵が小説家として世間に認められるきっかけとなった作品『くれの廿八日』を発表する約一〇年前、不知庵と称して先鋭的な批評活動を活潑に行っていた時に発表した最初期の小説である。この時期の小説は、「当世文学通」が後の『文学者となる法』に発展する諷刺性を孕んでいることで注目される程度であり、「酒鬼」については考察の対象となることすらほとんどない。

わずかな先行研究を参照すれば、禁酒運動に役立つ目的で書いたとするものや、西洋の小説に着想を得ているという指摘もあるなど混在している。本章では、これ

らの研究が見落としてきた同時代の「市区改正条例」公布という観点を取り入れることで、都市整備と禁酒をめぐる様々な言説が沸き起こる過程を整理し、さらに小説に用いられたモチーフの比較、不知庵の批評や読書環境、翻訳に関する新たな資料をもとに、表面上は禁酒を謳いながらも、実際は都市と飲酒による哀れな没落者を描いたゾラとディケンズの作品に着想を得た人情小説を試みていたのではないかという説を提出した。

さらに右の考察を踏まえ、この時期の神田の裏屋を舞台に、酒に身を持ち崩した士族を不知庵がどのように描き出したのか、「酒鬼」に特有の感覚表現に注目しつつ、禁酒の裏側に描き込んだ「悲惨憂愁」を読み解き、批評だけでは見えてこない小説観を明らかにした。

### 第三章：「内田不知庵」「もみぢ狩」論——典拠と小説の構成について（『文藝と批評』

第一一巻八号・平成二五年一月）

「もみぢ狩」（『婦人世界』明治三二年一〇月—明治三三年一月）は、「酒鬼」と同じく明治三二年に不知庵が書いた第三番目の小説である。

山田美妙と不知庵の往復書簡によって偶然見つかったこの作品はまったくの新出小説である。本論ではまず、不知庵がこの小説を書くにあたって依拠したと考えられる先行作品や小説のモチーフについて検討した。先行する福井辰彦氏との共著（「山田美妙・内田不知庵往復書簡紹介および「内田魯庵著述年譜」未紹介小説「もみぢ狩」について」『論究日本文学』第九八号、平成二五年五月）では「もみぢ狩」が、謡曲「紅葉狩」の翻案小説であることを指摘したが、本論ではさらに式亭三馬『人間万事虚誕計』を取り入れていることを具体的に検証し、二作が合わさって教訓小説となつていることを論じた。

その一方で、この小説にはこれらの教訓性を相対化しうる可能性も秘めている。それは不知庵が明治三二年の段階でディケンズやゾラなどの西洋の小説から着想を得たと思われる「悲惨憂愁」の観点である。不知庵は小説のなかに、依頼者の要望に沿うような教訓的な要素を取り入れつつも、そこに没落した者たちや、貧しい生活を送っている者への同情の眼差しも描き込んでいる。結局後者の要素は作中で未消化に終わり、教訓小説を相対化するまでには至らなかったが、ここから不知庵は第三者からの依頼に従って小説を書いていたのみならず、そこに自らが理想とする小説の要素を積極的に取り込んでいたことがわかるのである。

#### ・初期評論・文学観について

第四章：「強硬」な不知庵——『浮城物語』論争における内田不知庵の「小説」の保持（初出『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第三分冊五四集・平成二〇年三月）

明治二二年末から二三年にかけて交わされた「文学極衰」論争・『浮城物語』論争は、近代文学史においてごく初期に行われた小説のありかたをめぐる論議として特筆され、ここでは「人情小説」の「狭隘」な天地を批難して雄大なテーマを要求する啓蒙主義者と「外面の大」を批判して、「内面の大」にこそ文学の「大」が存在すると主張する近代文学者との対立、そして啓蒙主義者の「敗北」と意味づけられてきた。ところで、軽妙な諷刺を用いる皮肉屋として知られていた不知庵がこの論争に限って「強硬」な姿勢を取っているのは何故だろうか。本章はこのような立脚点から、論争のなかに溶けこんだ（阿世）という認識や主張の根幹となる文学意識を検討することで、不知庵をめぐる状況やそのなかで保持した「小説（ノヴェル）」の問題にふれ、啓蒙家と人情小説家という対立図式に還元できない側面を浮き彫りにした。

「文学極衰」論争・『浮城物語』論争は、その代表的な発言者の顔ぶれも相俟って、啓蒙小説家と、新興の文学の動きを擁護する文学者の対立という形を呈してはいるが、そこにはまたロマンスとノヴェルの問題が絡み合っていた。不知庵にロマンスの勃興に対する排除意識があったことは確かだが、しかし、この批判の矛先が、啓蒙家だけに向いていなかったことが同時代の書簡からわかる。つまり、表面的には啓蒙家の功利主義、小説娯楽主義とロマンス的要素を文学界の潮流と画するように記しつつ、『小説神髓』のなかの「小説（ノヴェル）」の歴史的記述や進化論的変遷をもって小説の意義を強調・保持する不知庵の意識には、この状況に沈黙し静観している文学者にも向いていたのである。

第五章：「巻を掩ふて嘆ずる」不知庵——明治二三年の書簡からみるドストエフスキ  
Ⅰ 『虐げられた人びと』の読書体験と批評の変化」（初出『日本近代文学』  
第八二集・平成二二年五月）

明治二二年の夏に内田不知庵がドストエフスキの『罪と罰』を読み、深い衝撃を受けたことはよく知られているが、翌年の春に旅先で読んだ『虐げられた人びと』の「衝撃」についてはほとんど言及されることはない。『虐げられた人びと』を読んだ直後の明治二三年五月は、ちょうど同時期の評論や文学論争のなかで、不知庵の小説観が変化をみせる時期にあたり、この読書体験の影響が指摘できる。

本論では、同時代資料として旅先から坪内逍遙に宛てた不知庵の書簡を取上げ、英語版『虐げられた人びと』の読後の感想を具体的に検討し、不知庵が少女ネリーとその悲惨な境遇に「衝撃」を受けていたことを読み解いた。そしてその感銘は同じ旅先で読んだ『好色一代女』の読後感とも共通し、不知庵に理想の小説観を与えた体験と位置づけた。

この書簡をふまえて、文学観が変化を示しはじめる『浮城物語』の批評を見れば、その主張に『虐げられた人びと』から得た観点の反映を確認することができる。こ

れまで抽象的とされた不知庵の「小説」観には常に理想となるべき具体的な作品が意識されていたのである。そして不知庵が重視した小説のなかに描かれるべき「社会」とは、人間の本性を歪めるほどの悲惨な境遇を指し示し、「人間の運命」とはその中でも生きる人びとの生き様を意味し、「観念」とはそのような現実を「小説」として切り取る者の位置として捉えられることを論じた。

第六章：「三日月」に見出す〈詩〉の材——明治二四年、内田不知庵が村上浪六の登場に見た「小説」の可能性と危惧（初出『日本文学』第六〇巻第九号・平成二三年九月）

明治二四年、『郵便報知新聞』の日曜付録「報知叢話」に掲載された「三日月」は、江戸の町奴を題材にした村上浪六の登場作であり、現在では大衆小説の一ジャンル「撥鬢小説」（任侠小説）の嚆矢として位置づけられている。そして、先行研究では内田不知庵は、村上浪六とその文学的価値を当初から否定した人物の代表格として位置づけられてきた。

本章は、浪六の「三日月」を不知庵がはじめて取り上げた評論を検討し、そこに「詩」（あるいは「詩材」という言葉が用いられていることに注目した。その理由は、ここで用いている「詩（ポーエトリー）」という概念は、坪内逍遙の提唱した写実論を乗り越えるために不知庵がこの時期に摸索していた、写実の奥にある「文学の真の価値」のことを意味しているからである。そこで本章では、浪六についての不知庵の批評を「詩（ポーエトリー）」の観点から捉え直すことで、不知庵が浪六の登場時、「三日月」に同時代の文学観を刷新する「小説」の可能性（悲劇的要素による心情の深化）を見出していたことを指摘した。しかしその一方で、不知庵は浪六の小説のなかに、それを妨げかねない可能性（つまり読者の嗜好におもねった人物造型の平板さ）も持っていることを指摘し、大きく変化するこの時代の潮流を捉えようとする不知庵の批評が、その二つの可能性のなかで揺らいでいたことを論じた。

・武蔵屋叢書閣と不知庵について

第七章：「内田不知庵と武蔵屋叢書閣——「武蔵屋本」出版事業と〈ドラマ〉論——」（初出『国文学研究』第一六一集・平成二二年六月）

明治二〇年代の浄瑠璃本の復興に大きな役割を果たした武蔵屋叢書閣の翻刻本（通称「武蔵屋本」）の出版事業には、不知庵が饗庭篁村と共に「相談役」として関わっていたことが指摘されているが、その詳細については分かっていない。本章は不知庵の書簡にある武蔵屋本に関する記述と「ドラマ」という言葉に注目し、武蔵屋本の序文を検討することで、彼が『文学一斑』へと通じる「ドラマ」という観点

から近松門左衛門らの世話浄瑠璃を再評価しようとしていたことを明らかにした。しかし留意すべきは、この再評価の試みが時代浄瑠璃も含め浄瑠璃の歴史や作者をも評価しようとする武蔵屋叢書閣主人や篁村の近松観と食い違っており、それが序文と内容の編集上の差となって武蔵屋本に表れていることである。本章では、両者の接点を見出すために武蔵屋が謳った「近松世話浄瑠璃」の「完成」という出来事に注目し、不知庵の「ドラマ」が、その「先進性」の面で出版事業に取り入れられていたことを論じた。

第八章：「内田不知庵と武蔵屋本『傾城買二筋道』」（初出「武蔵屋本『傾城買二筋道』」

署名「発行者識」の緒言について」『文藝と批評』第一一巻三号・平成二三年五月）と「明治二四年、再生する『傾城買二筋道』——武蔵屋本『傾城買二筋道』署名「発行者識」の緒言について（続）」『文藝と批評』第一一巻五号・平成二四年五月を合わせたもの）

明治二〇年代の半ばになると井原西鶴など江戸期の文学が注目を浴びはじめ、この時代の文学作品が相次いで翻刻、出版される。本章では前章に引き続き、不知庵と関わりのあった武蔵屋叢書閣から出版された洒落本、梅暮里谷峨『傾城買二筋道』（明治二四年六月）を取り上げた。まずは、この本の緒言が無署名であることから、この本の出版前後に書かれた田辺花圃あて内田不知庵書簡を用いて、その内容と緒言の対応を根拠に筆者が不知庵であることを特定した。さらに注目されるのは、この緒言に「ドラマ」の要素を看取することができ、この観点によって作品が評価されているということである。不知庵は、遊戯的機智が主流だった江戸期には高く評価されることのなかった『二筋道』を「人情の秘奥」の深淺から捉え直すことを主張する。そして新たな読みの観点として提供された「外界の抑圧」によって「内界の情緒」が交錯する有様をより深く描く」という『文学一斑』の（ドラマ）論を髣髴とさせる要素は、明治二〇年代にふさわしい「ライト、リテレチュア」に求められるべきものと位置づけられる。そのために武蔵屋本版では別の時期に書かれた『二筋道』の前編・後編・三編を一つの作品として合本し、『傾城買二筋道』を「憂愁と哀婉」の物語として刊行するのである。

不知庵は、武蔵屋本『二筋道』を通して、「ドラマ」という新たな評価軸のもとに作品を再評価し、「現代文学」として提示しているのである。

・内田不知庵・田辺花圃の往復書簡について

第九章：「田辺花圃宛内田不知庵書簡の再検討——早稲田大学中央図書館蔵三宅花圃書簡との復元へむけて——」（初出『早稲田大学高等学院研究年誌』第五七号・平成二五年三月）

第一〇章：「内田不知庵宛田辺花圃書簡の翻刻と紹介——早稲田大学中央図書館蔵三

## 宅花園書簡との復元へむけて(二)——(書き下ろし)

この二つの章では内田不知庵と田辺花園(のちの三宅花園)の交友、および往復書簡について検討を行った。

内田魯庵が書いた書簡は、不知庵時代のものも含めていくつか残っているが、いまだその全貌は明らかになっていない。そのなかで比較的多くの書簡を収め、先行研究でもたびたび用いられてきたものに『書物展望』(昭和一〇年六月)に安成二郎氏が翻刻した「内田魯庵の書翰」がある。野村喬氏の著した評伝『内田魯庵伝』にもその一部が引用され、その他明治二〇年代の不知庵の動向や文学観を検討するために用いられることの多い書簡ではあるが、これらには一部年月日を特定できないものがあり、研究資料として用いる際に、引用者がそれぞれ年代を推測するという問題を抱えていた。

その事態を打開する手がかりとなったのが、早稲田大学中央図書館が所蔵する「三宅花園書簡」(本間久雄旧蔵・文庫14 C125)である。

本間久雄氏が中野清子氏から譲り受けたこの書簡を見ると、先の安成氏が翻刻した書簡と対になるものであることがわかる。さらに、花園書簡には消印のついた封筒が残されており、その内容を照合することによって不知庵の書簡の年月日を割り出すことができる。

第九章では、安成二郎氏が翻刻した魯庵書簡をもとに、新たに花園書簡との対応関係から年月日を特定する作業を行った。また書簡には解説と注釈を付けたが、これは先行する安成氏の紹介をさらに不知庵研究の観点から発展させることを目的としている。不知庵の書簡は、まさに彼の読書が生み出した引用の宝庫といった体となしている。これらに注釈を付けることによって当時の彼を捉えていた関心や読書環境を明確に浮かび上がらせることができるのである。

第一〇章は、第九章の対になる花園の書簡を、早稲田大学中央図書館の許可を得て翻刻し、解説を付けた。花園の書簡には日常的な出来事の記事が多く見られ、漢詩人でもあった父田辺蓮舟のことや、当時の田辺家の様子がよく描かれている。当時の文学に関する話題もあるが、これらは解説で補うことが十分可能であり、こちらの書簡には注釈は付けていない。内容の性質上、解説では不知庵との気質の違いや彼女の生活や人柄がよくあらわれるように記した。

両書簡が交わされたのは、主に明治二四年から二五年であり、花園は主に『女学雑誌』に小説や随筆を、不知庵は『国民之友』に批評や翻訳を載せていた。不知庵研究から見れば、『文学一斑』を執筆し、またドストエフスキーの『罪と罰』の翻訳へとつながっていく時期にあたり、批評や随筆などの公の発言が次第に減っていくこの時期の不知庵の様子を知るうえで非常に重要である。往復書簡からは当時の文学界の状況や、不知庵が花園に自らが関わっていた武蔵屋本を贈っている様子も見られ、ここで得られた新たな知見は、本研究(第七章・第八章)でも利用している。

・『文学一斑』——〈ドラマ〉論の射程について

第一章・内田不知庵『文学一斑』論——「道義」の媒介性から捉える〈ドラマ〉論の射程（平成二十二年七月文芸学研究会にて発表）

内田不知庵が武蔵屋本の出版事業（第七章・第八章）と関わるなかで膨らませ、『文学一斑』（博文館、明治二五年三月）の「戯曲、一名世相詩（ドラマ）」で提示した〈ドラマ〉という文学観は、先行研究においては「人生及び社会の運命」を描く「ドラマ」論の一つとして、同時代の批評家（たとえば坪内逍遙や石橋忍月）と同じ流れのもとに捉えられてきた。確かにこのような理解は、同時代の小説のありかたをめぐる議論を俯瞰する上では有効である。しかし逆にこのような把握の仕方が、〈ドラマ〉を論ずる際、小説に「描かれるべきもの」つまり「人間の運命」を描くものとしての「ドラマ」に議論を集中させ、不知庵が追及してきた〈ドラマ〉が持っていた広がりを含めてきたとも言える。

本章では、『文学一斑』で不知庵が説く〈ドラマ〉の射程を捉えるために、それを成立させる条件として働く「道義」という言葉とその働きに注目した。この「道義」が「戯曲、一名世相詩（ドラマ）」で頻繁に引用されるヘーゲルの美学概念に着想を得、それを大きく読みかえることによって成立していることを確認し、不知庵が与える「道義」の意味やその役割に目を配ることで、〈ドラマ〉とは、描かれた対象（「人生及び社会の運命」）のみならず、そこから読者のなかに湧き起こる「同憐の情」をも含み、さらにその感情が「詩（ポエトリ）」と直結する射程を持つ文学論であることを明らかにした。本章後半では、この〈ドラマ〉論をもとに近松門左衛門『心中天網島』を取り上げ、石橋忍月や坪内逍遙らの同時代の批評家の「ドラマ」論との差を明確にし、創作という立場からではなく、読書と批評によって培った不知庵の〈ドラマ〉論の特徴を析出した。

終章・研究の成果と課題——「内田不知庵研究」総括（書き下ろし）

研究全体の総括となる本章では、ここまで論じてきた各章について、本研究全体のテーマと各章の課題設定の妥当性について所見を述べた。成果としては、「文芸批評家」としての活動のなかで『小説神髓』を乗り越えるべく体系化された〈ドラマ〉論の独自性、批評活動と並行して書かれた「小説」の研究の可能性、後の丸善での活躍を予感させる武蔵屋叢書閣との関わり、作家田辺花圃との交友など、これまで内田魯庵研究ではテーマとして取り上げられることのなかった文学活動や交友を新たに提示することができた。その一方で、批評家としての内田不知庵の最大の特徴でもあった「皮肉」や「諷刺」に関する研究が手薄になり、明治二〇年代における不知庵の「諷刺」と文学観の関わりに言及できず、偏りが生じてしまったこと、今はこれらの研究を含めた全体像の検討が課題として残されたことを総括した。